

ギデنزとサッチャリズム

— 社会理論と社会変動 —

宮 本 孝 二

キーワード：社会理論，社会変動，アンソニー・ギデنز，
マーガレット・サッチャー，サッチャリズム

はじめに

第1節 サッチャリズムの時代

第2節 ギデنز社会理論の展開

第3節 社会理論と社会変動

おわりに

はじめに

本稿で解明したいのは、社会理論と社会変動の関連の問題、すなわち社会理論家は社会変動の中でいかに理論構築ないし著作活動を行うかという問題である。著名なイギリスの社会理論家アンソニー・ギデنزは、1990年代半ばより「新しい労働党（ニューレーバー）」にいわば同伴し、「第三の道」の政策形成に努めてきた（Giddens, 1994, 1998, 2000）。したがって、その時期には社会理論と社会変動は密接に直接的に関連づけられていることは明らかであるが、それ以前の時期、とくにサッチャー首相が手腕をふるった80年代のサッチャー主義（サッチャリズム）の時代には、明らかにそれに批判的であったと想像されるにもかかわらず、社会学の教科書（Giddens, 1989）

を例外として、80年代のギデンズ社会理論の著作群において一切サッチャリズムへの言及は見られない。サッチャリズムの時代にギデンズは社会変動の中でどのように理論形成したのであろうか。この80年代のギデンズ社会理論と当時の社会変動との関連を明らかにするのが本稿の課題である。

社会理論とは、すでに宮本（2009）で提示したように、あらゆる具体的な社会現象を超越したところに、それらの現象を包括する抽象度をもって成立するいわゆる一般理論と、近代化というメガトレンドを前提にその現段階を全体的かつ動態的に把握しようとするところに成立する現代社会論と、認識のありかたや認識の方法について反省的に検討を深める認識論・方法論とによって構築される。したがって、それはその時代の社会現象についての具体的な認識を前提にしつつも、それらを捨象したところに成立するものであり、したがって表面的には現実と無縁に理論的思考のサイクルを回転させているだけのものと見られてしまいかねないのであるが、前提に生々しいその時々の実現についての認識があり、それとの関連において何らかの影響を受けると考えられる。以上のような視点から80年代のギデンズ社会理論の特性を明らかにすることを試みたい。

まず第1節では、主として1980年代末に刊行され当時の状況を生々しく記述している邦語文献（参照文献一覧に表示）に依拠しつつ、サッチャリズムの時代を概観する。1979年にイギリス首相となったサッチャーは、イギリス病と揶揄されるほどにまでになった社会を根本から変革することに取組み、サッチャー革命と称されるほどの変革を、社会学者や評論家や党内の執拗な批判にもめげることなく自らの信念を貫いて成し遂げ、1980年代のイギリスのみならず世界のありかたをも根本から変革する社会変動に深甚な作用を、功罪の評価は分かれるにしても現在に至るまで及ぼすことになったのである。

次に第2節において、ギデンズ社会理論の1960年代から今日までの展開を概観した上で、とくに1980年代の諸著作についてその要点を紹介する。現代

社会論の系列に属する著作群にも、一般理論に属する著作群にも、表面的にはサッチャリズムの時代の社会変動の具体的な現われはまったく見られないのであるが、社会理論的に重要な視点や概念が提示されていたのである。

最後に第3節でギデンズの80年代の社会理論の著作群が、サッチャリズムの時代の激しく大規模な社会変動と深く関連していたという仮説を、第1節と第2節との成果に基づいて提示することにしよう。

第1節 サッチャリズムの時代

サッチャーがイギリス初の女性首相として登場したのは1979年であるが、1975年にまず保守党党首の座を党内の競争に勝ち抜いて獲得したのがサッチャリズムの時代の始まりだった¹⁾。教育相しか閣僚経験のないサッチャーが党首選に立候補したのは、1974年の総選挙で労働党ないし労働組合勢力に敗北した前首相ヒースたちの政治姿勢を批判するためであった。戦後から1970年代に至るイギリスの当時の状態は、福祉国家の理想の破綻によるイギリス病悪化そのものであった。とくに1974年にヒース首相が労働組合を相手にイギリスは政府が統治するのか、それとも労組なのかと勝負に出たものの惜敗し、労組の横暴はますますひどくなり、非合理的賃上げ要求と無軌道なストライキ実施が繰り返され、労働党のキャラハン政権すらそれに悩まされ、イギリスは財政破綻、市民生活の破綻に見舞われたのだった。特に1979年1月は「苦渋（憤懣）の冬」といわれるように公共サービスの労働組合のストや、流通産業の労働組合のストによって、ロンドンの通りにはごみ袋が山積するという惨状を呈したのであった。

第2次世界大戦後イギリスは戦争の英雄チャーチルの保守党ではなく、福祉国家を唱道した労働党のアトリー政権を選択し、福祉国家の構築に向けて

1) サッチャーの党首選勝利から首相就任までの経緯については、黒岩（1989）：123-89頁、三橋（1989）：41-50頁。

動き出した。50年代から60年代にかけては世界経済の上昇機運もあり福祉国家システムが曲がりなりにも作動していたが、1970年代前半のオイルショックを契機に経済成長は鈍化し、インフレと高失業率というスタグフレーションがイギリスを襲ったのである²⁾。したがってサッチャーの改革の根本にあるのは、戦後イギリスが構築してきた福祉国家の見直し、そこにおける既得権の解体、最大の既得権団体であらゆる変革に抵抗する労働組合の運動家と労組指導部への攻撃、労働者階級の中流化ないし自立市民化による新しい社会の形成、犯罪や違法行為への容赦ない実力行使が可能な小さいが強力な政府の実現であり、たんに強いリーダーシップというだけではなく、必要であれば国家にのみ正当化された暴力行使をも辞さないという意味でも強い政府を追求したのである。ただし79年の政権発足当時にサッチャリズムと一括される諸要素がすべて出揃っていたわけではない。80年代の社会変動の中で次々に生じる諸問題に対応するなかで、サッチャー改革の特性が顕在化していき、それが結果的に出揃ったのがサッチャリズムという思想と運動なのであった³⁾。

その第1の特性は、福祉国家こそ経済停滞の原因であり、自立した個人による競争社会にしか経済成長を取り戻す道はないという主張である。福祉国家は、大きな政府として国家を肥大化させ、増えすぎた公務員の人件費で財政が圧迫され、しかも非効率な官僚主義によって費用ほどには成果は上がらず、他方では国民は福祉依存症におちいり、社会保障に依存して貧しいが怠惰な生活に慣れ親しんでしまうという状態となっていた。サッチャーにとって、福祉国家は財政赤字の点でも、国民の福祉依存文化においても、根本的な見直しを必要とするものであった。民営化と市場化こそが変革の方向性を

2) 戦後イギリス経済の軌跡については、内田編(1989):2-4頁、舟場(1998):50-60頁。

3) サッチャリズムの諸要素については、三橋(1989):51-92頁、高畑(1989):36-45頁。なお、高畑は「サッチャーイズム」と表記している。

示すものとされた。福祉国家はケインズ主義と適合的で、いわば公共投資による社会、経済の活性化が基本的立場であり、これに労働党はもちろん保守党の主流派も乗っていた。それに対してサッチャーはケインズ主義を批判するマネタリズムの財政政策の立場を採用し、それに加えて、国営企業の民営化、民間活力の活性化のための規制緩和、資本の運動を大衆にまで浸透させる大衆資本主義の諸方策を実施した。民営化による株の公開だけではない。住宅政策については大量の公共住宅の供給よりも、公共住宅の払い下げ、個人ローンの住宅供給の道を選び、労働者階級を含めた多くの大衆がそれにこたえてローンを組み公共住宅の払い下げを受けたり、住宅建設に励んだりしたのである⁴⁾。

サッチャーは信念の人であり、強固なイデオロギストである⁵⁾。ヴィクトリア朝の市民社会を理想とし、健全な家庭をもった自立した中流市民によって構成される市民社会の実現を目指した。サッチャーの思想、具体的な政策や改革、個人的な価値観、リーダーシップや政治のスタイルの総体がサッチャリズムを形成している。その思想ないし価値観の根本になるのは、自助自立、努力と勤勉、儉約の精神であり、それはヴィクトリア朝イギリスの市民社会の中産階級の精神そのものであった。それが生地グランサムに息づいており、それを体現したのが両親、特に父親であり、その影響はサッチャーのパーソナリティ形成に強く作用したようだ。サッチャーの家族観も女性観もきわめて古典近代的である。性別役割分業、専業主婦を当然のありかたのみなし、例外的に仕事を持つ女性が登場するが、すべての女性にそのような生き方は強制されてはならず、また、仕事をする場合でも女性の特性を生かさねばならないと考える。これまたヴィクトリア朝のイギリスが産業化の進展

4) サッチャーの経済政策については三橋 (1989) : 93-196 頁, および内田編 (1989) : 48-139, 190-271 頁。なお、住宅政策に焦点を合わせサッチャリズムの実像を政治学的に解明しようとした優れた業績に豊永 (1998) がある。

5) サッチャーの生い立ちとその思想形成については高畑 (1989) : 68-73 頁, 三橋 (1989) : 21-33 頁, 黒岩 (1989) : 13-76 頁。

とともに生み出した古典近代特有のありかたで、男性は仕事で女性は家事労働という性別役割分業の近代家族像が定着したのはその時代なのであった。ヴィクトリア朝の社会のありかたに立脚した価値観をもつサッチャーは明らかに時代錯誤の意識の持ち主であった。その思想はヴィクトリア朝の社会の暗黒面を見ない一面的なイデオロギーにすぎない。

しかし、その信念や思想が福祉国家見直しの時代の流れに適合するという事態が生じたのである。サッチャーが主観的に目指したことが時代錯誤であっても、客観的には時代に適合したと思われる。80年代の世界の先進社会では、社会主義社会は崩壊に向けて歩みを続けており、福祉国家システムもグローバル化のなかでいよいよ立ち行かなくなる兆しを見せ始めていた⁶⁾。この時期に社会主義社会の崩壊を予測した少数の人々はいたが多くの人々はそれを夢にも思わず、福祉国家についてもそれを根本的に問い直す思想も運動もまだ細々としたものであった。しかし現時点から見れば、80年代の世界は明らかに民活・民営化、規制緩和、小さく強い政府、自立する自律的な市民による市民社会の形成のトレンドが顕在化しつつあった時代なのであった。サッチャーはその思想と価値観によって、いち早くそのトレンドの可能性を把握することができたのである。

サッチャー改革は当初から成果を見せ始めたわけではない。それどころか第1期政権の4年間は経済は悪化する一方で、失業者の急増、インフレの高進、経済成長の鈍化に保守党内部からもマネタリズムや緊縮財政の政策を中止し大きな政府にUターンすべきだという声も大きくなったが、サッチャーはあくまで信念を曲げず、あなた方(ユー)が戻れ(ターン)と言い放ち、政策を持続させた⁷⁾。サッチャー人気は低下する一方で、第2期政権の可能性はほぼ消滅したと思われていたが、そこに突如勃発したのが、アルゼンチ

6) この変動論については、宮本(2009):201-20頁。

7) サッチャー第1期政権の危機については、黒岩(1989):191-203頁、三橋(1989):93-117頁。

ンの軍事政権のアルゼンチン沖のイギリス領フォークランド諸島への侵略であった⁸⁾。通常ならそんな時期に勃発した南半球の小さな島々の問題など経済的には問題外であり、アルゼンチン軍事政権に妥協して植民地返還で始末するのが楽な道であったことは明らかであったが、サッチャーは断固反撃に出ることを決断し、イギリス軍部に戦争での勝利の可能性を確認しつつ、開戦に踏み切ったのであった。そして3ヶ月の戦争の結果、犠牲なしとはいかなかったが、アルゼンチン軍事政権を降伏に追い込むことに成功した。それによって、経済的に破綻寸前のイギリス社会においてサッチャー人気が昂揚するという奇妙な現象が生じた。83年の総選挙では労働党に圧勝し、それによってサッチャー第2期政権は圧倒的なパワーを発揮し始めたのである。

まず労働組合との全面的対決姿勢を鮮明にし、実際に対決過程に突入していった⁹⁾。戦争が対外暴力の行使であるとすれば、ストライキで対抗してくる暴動並みの運動を繰り広げる労働組合への対抗は対内的な暴力行使である。いずれにしても国家権力の暴力的側面が顕在化し、あるいはサッチャー政権に顕在化させることへのためらいがなくなったかのようであった。そして、暴力行使を準備するだけでなく、戦争並みに資源補給計画も十分立案し準備を重ねたうえで、まずは炭鉱労組に戦いを仕掛けた。当時の炭鉱労組は極左のスカーギル委員長が支配し、彼はリビアのカダフィとさえ連携し国家権力に対抗しようとしていたのであるが、さすがに全国規模では極左路線には反対が強いので、跳ね上がりの活動家を擁する地方支部で山猫ストを打たせるという戦術をとっていたが、地方支部でも地域によるが極左跳ね上がり集団の指導部への反旗が翻えり、ひいては全国規模での反スカーギルの流

8) フォークランド紛争については、サッチャーのリーダーシップをテーマとしている黒岩 (1989) : 205-26。ただし高畑 (1989) も三橋 (1989) もサッチャリズム論におけるフォークランド紛争の位置づけは大きくない。

9) サッチャー第2期政権と労働組合との戦いについては、黒岩 (1989) : 227-33、高畑 (1989) : 46-68、三橋 (1989) : 155-65。

れも強くなっていたのである¹⁰⁾。

サッチャー改革によってイギリスはどうなったのか。まず財政赤字は1987年にようやく黒字化し、国民所得も消費量も増加し国民経済は活性化した。ただし、それがサッチャー改革の効果であるのか、北海原油の発見による国庫収入増などの天運に恵まれただけなのかは議論が分かれるところである。天敵の労働組合は組織率を大幅に低下させ、ストライキ数も激減し、政策決定過程への直接的影響力はほぼ失われた。戦争や治安対策における強い政府は、国民の意識に誇りや自信をもたらした。ただし、経済学者内田勝敏らはサッチャーの経済政策の軌跡をたどり、産業構造、産業政策、民営化政策、国有産業の解体、海外投資、国際収支、貿易構造、金融政策、財政戦略、地方財政、農業政策などについて点検し、イギリス経済が本当に甦ったのかを検証しているが、1989年の時点での評価は厳しく、とくに地方税改革としてのコミュニティチャージ（いわゆる人頭税）の創設にはその行方を危ぶむ見解を明示しており、1991年に起こることになるサッチャーの失脚の可能性を示唆していた¹¹⁾。

サッチャー改革の負の側面は、新自由主義の民活・民営化政策、福祉国家見直し政策が不可避免的に伴う帰結であった¹²⁾。いわゆる格差社会の登場である。経済の活性化はあらゆる階級階層に浸透せず、富める者はますます富み、貧しき者との格差は拡大する。経済活性化のための税制改革は高額所得者にとって一層有利であり、福祉国家の見直しによる社会保障の削減はもとも福祉依存度の高い低所得者階層の収入を直撃し、彼らを下層階級から底辺階級（アンダークラス）に追い落としかねない傾向があった。サッチャーから見れば、悔しければ頑張りなさいということになるのであるが、個人的

10) サッチャー改革の帰結の1989年当時の中間総括については黒岩（1989）：227-37、高畑（1989）：144-252、三橋（1989）：93-240、内田編（1989）。

11) 内田編（1989）所収の竹原憲雄「財政戦略と地方財政－地方行財政改革の展開と課題」

12) 高畑（1989）：185-206。

な努力ではどうしようもない構造的条件の存在や、社会的支援による社会の活性化の可能性はサッチャーの視野の外にあった。

サッチャー改革は1980年代後半にその成果を見せ始めたが、サッチャーにとって不運なことに経済停滞が再びイギリスを襲い、税収が悪化し財政赤字も不可避となり、それへの対応策として前述の人頭税と称されるすべての市民に一律頭割りで課す税金が案出された¹³⁾。それはたしかに自立した市民にふさわしい社会的責任としての税制ではあったが、この税制はやはり貧困層に相対的に負担が重く、多くの市民が反発するところとなり、その反発の聲に選挙への影響を恐れた保守党内部からの党首交代の声に抵抗しきれず第3期任期途中で辞任となってしまった。保守党内部からの党首交代の圧力は、選挙結果を恐れてのことだけではなく、徐々に独善性を強めてきたサッチャーの党内運営、ヨーロッパからの頑固なまでの孤立政策への反発もあったようだ。こうしてサッチャーは志半ばにして1991年に任期半ばで辞任に追い込まれたのであった。

今日に至るもサッチャー改革の評価は定まっていない。しかし、1997年に保守党から政権を奪取した新しい労働党の指導者ブレアが回顧録で明言するように¹⁴⁾、サッチャー改革なくしてその後のイギリス社会の発展はなかったと思われる。たしかに産業構造の根本的転換によって金融資本主義に重点を置きすぎたため2008年のリーマンショックによってイギリス経済は大きな打撃を受け、バランスのとれた産業構造の再構築に向けての努力が保守党のキャメロン政権で取り組まれており¹⁵⁾、それらの困難をすべてサッチャー改革に帰する向きもあるが、それはあまりにも一面的な評価と言わねばならない。世界規模での社会変動は、おそらく1970年代以降に新しい過程に入り現

13) 三橋 (1989) : 229-40。

14) 2010年にイギリスで出版されたBlair, A., *Journey*の訳書。石塚雅彦訳『ブレア回顧録・上』日本経済新聞出版社, 188頁。

15) キャメロン政権の取り組みについては、岐部秀光『イギリス矛盾の力-進化し続ける政治経済システム』日本経済新聞出版社, 2012年。

在も進行中であり、サッチャー改革の最終評価はその帰趨を持つてのことになる。

第2節 ギデンズ社会理論の展開

ギデンズの社会理論については、1960年代後半から90年代半ばに至る約25年間の展開、その全体像と可能性をすでに宮本（1998, 2002, 2006）で明らかにした。そして90年代後半から現在に至るまでの15年間については、その第三の道の社会理論の展開を宮本（2007）で紹介している。なお、第三の道の社会理論は、1994年の『左派右派を超えて』の範囲内に基本的に収まっているので、宮本（1998）によってその全体像が把握されていると言うことが許されよう。そこで本節では、それに依拠して、まずギデンズ社会理論の60年代終わりから90年代半ばに至る展開過程を概観し、次に第3節で社会理論と社会変動との関連を分析するために、とくにサッチャリズムの時代である80年代の諸著作について詳しく紹介しておく。

60年代にハル大学を卒業しLSE（ロンドン大学経済学政治学院）の大学院のマスターコースを終えレスター大学講師となったギデンズは¹⁶⁾、デュルケム論やパーソンズ論について論文を執筆しつつ、古典的な社会学者の著作を読破する作業を蓄積していた。その成果が最初の単独著書『資本主義と近代社会理論』（Giddens, 1971）に結実したのであり、それはデュルケム論だけでなく、ウェーバーとマルクスについての論考をも収録した最初の単著であった。そしてその2年後の『先進社会の階級構造』（Giddens, 1973）によって現代社会の全体的構成を把握する視点と、階級構造化という概念を手に入れた。この階級構造化が構造化という一般概念を生み出し、それを基軸として初めて構造化理論を提示したのが『社会学の新しい方法規準』（Giddens, 1976）であり、個々の論点を一層深く究明したのが『社会理論の中

16) ギデンズのライフヒストリーについては宮本（2011 a）。

心問題（社会理論の最前線』（Giddens, 1979）における一般理論としての構造化理論の展開なのであった。

そして1980年代のギデンズは、構造化理論の展開である一般理論として『社会の構成』（Giddens, 1984）、さらに構造化理論に限定せず現代社会学における多様な社会理論的課題を究明した『社会理論と現代社会学』（Giddens, 1987）を刊行する一方で、現代社会の全体像の把握を目指す社会変動論としては『史的唯物論の現代的批判』（Giddens, 1981）、『国民国家と暴力』（Giddens, 1985）そして『近代の帰結（近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結）』（Giddens, 1990）を刊行した。ただし、後述のようにこれらの著作ではサッチャーもサッチャリズムも一切登場しない。ギデンズが初めてサッチャーについて言及したのは、89年の分厚い教科書『社会学』初版（Giddens, 1989）においてであった。

90年代には『近代の帰結』に続く現代社会論として『モダニティと自己アイデンティティ』（Giddens, 1991）、『親密性の変容』（Giddens, 1992）を相次いで刊行したギデンズは、さらに94年にはサッチャーの後継の保守党政府の時代から新しい労働党の時代への転換を準備する第三の道を基礎づけることになる著作『左派右派を超えて』（Giddens, 1994）を刊行し、そして97年の労働党政府成立の翌年に『第三の道』（Giddens, 1998）を発表し、また97年にケンブリッジ大学教授からLSE（ロンドン大学経済学政治学院）総長に転身した。21世紀になってからは、第三の道の系列の『第三の道とその批判』（Giddens, 2000）などによって第三の道の諸政策をさらに検討し改善していくための作業を進め、ブレアより一代貴族に任じられて上院議員となり今日に至っている。

以上、ギデンズの社会理論の展開を概観したが、それではサッチャリズムの時代である80年代に焦点を合わせ、一層具体的にその社会理論の内容を明らかにすることにしよう。

前述のように、それらは大きく2つの系譜に区分される。第1に、一般理

論の展開であるが、それはマクロ社会理論としての一般理論であり、84年の『社会の構成』と87年の『社会理論と現代社会学』がその主要著作であった。『社会の構成』は70年代後半に生成され展開された構造化理論がさらに発展した構造化理論の決定版であり、パーソナリティ論や行為論から相互行為論ないし社会過程論を経て、マクロな行為ともいべき社会運動についての議論を媒介にしつつマクロ社会の構造論と変動論につながる体系性を示した大著である¹⁷⁾。また、『社会理論と現代社会学』は多様な雑誌や単行本に寄稿した論文の集大成であり、その内容は宮本（1998）で明らかにした通り、行為と構造、歴史と運動という視点からまとめられるものであって、まさにマクロ社会理論としての一般理論の書であった。

構造化理論によれば構造は行為ないし相互行為との関連においてのみ存立しうるものであり、行為や相互行為もまた構造なしには成立しえないと把握されるが、重要なのは構造が意味規則や規範（意味規則の使用や資源動員の仕方を規制する意味規則）や資源配分の事実上のシステムであること、その事実上のシステムは言葉の本当の意味でヴァーチャルなシステムであること、そして意味規則が用いられる行為ないし相互行為であるコミュニケーション、規範が適用される行為ないし相互行為であるサンクション、資源が動員される行為ないし相互行為であるパワーに区分されることを明らかにしたことであった。特にパワーについては宮本（1998, 2002, 2006）において、それは正確に表現するならば資源動員可能性そのものであり、資源動員に伴う意識ないし目的形成過程には意味規則と規範が使用されることから、パワーは意味規則と規範と資源の相互媒介的動員可能性として把握され、とくに資源動員による目標達成を目指す行為から成る相互行為としてのコンフリクト、資源動員によって相互に資源が提供されあう相互行為としてのエクステ

17) 『社会の構成』は本邦未訳である。内容の概要については宮本（1998）：88-105頁。

エンジに区分されるべきであると指摘したのであった。すなわち、筆者のギデンズ社会理論の解釈の最大の特徴は、そういう意味でのパワー概念の社会理論における中心性ということであった¹⁸⁾。

行為ないし相互行為と構造との相互に条件となり帰結となる関連性を構造化として把握するギデンズは、それらをミクロ次元とマクロ次元とに単純に対応させているのではない。そのような誤った批判に応えるためもあって、ギデンズはマクロな行為としての運動と、ミクロからマクロに至る構造の多元性を84年の『社会の構成』で強調したと思われる。そして運動概念の強調は意味規則と規範と資源の区分によって成立する相互行為と構造のそれぞれの3つの側面のうち、資源動員可能性としてのパワー、したがって意味規則や規範をも相互媒介的動員過程に巻き込んでいくパワーの中心性とまさに対応しているのである。さらに、運動とパワー概念の中心性は、87年の『社会理論と現代社会学』でも明示されていた。そこに収録された現代社会学の歩むべき道をいくつかのテーゼにまとめた論考においても運動概念の重要性が示されていたのである¹⁹⁾。社会において問題を見出し、その問題解決を志向し、その他の運動、とくに最強の運動である国家（政府）とのコンフリクト過程を推進する運動こそ、現代社会論としての現代社会学の中心問題にほかならず²⁰⁾、ギデンズ社会理論におけるパワー概念の中心性は、80年代の彼の一般理論において運動概念の中心性としても現れていたのである。

一方、1980年代のギデンズの業績の第2の系譜は、81年の『史的唯物論の現代的批判』と85年の『国民国家の暴力』、そして出版は90年であるが80年代末におそらくまとめられた『近代の帰結』であり、それらはまさに近代

18) ギデンズの構造化理論を、パワー概念を基軸にして把握する視点については、宮本（1998）：31-47頁および宮本（2009）：131-40頁。

19) 『社会理論と現代社会学』所収の「社会学の将来についての九つのテーゼ」の解説は、宮本（1998）：82-8頁。

20) 諸運動の絡み合いとして現代社会論を構築する視点については、宮本（1998）：198-207頁。

化というメガトレンドを全体社会の構造とともに把握せんとする壮大な試みなのであった²¹⁾。『史的唯物論の現代的批判』の内容はマルクス主義のパワー論が所有に基づくものに偏向しており、社会変動論も経済的要因を偏重した解釈図式に陥っていることを批判し、軍事的なパワーをも含む政治的パワーのあり方や作用を重視した全体社会論や社会変動論を、世界システム論の知見をも継承しつつ提示したものであり、そして4年後の85年にその第2巻として出された『国民国家と暴力』は、第1巻の内容を一層洗練されたものに仕上げられており、近代のグローバル化された社会における国民国家の対内的および対外的特性を、資本主義および産業主義への対応という側面と、国民国家の統治や運営における監視と暴力という側面とに区分して把握し、それぞれの側面に労働運動や環境運動、民主主義運動や平和運動を対置させており、ここでもギデンズにおける運動論の重視が示されていた。

しかしながら意外なことに、以上の著作ではサッチャーやサッチャリズムへの言及は皆無である。タイトルからすれば当然言及があつてしかるべき『国民国家と暴力』においてすらそうであった。前述のように89年のテキスト『社会学』においてのみ、サッチャーやサッチャリズムに言及しているが、その第10章「政治と統治、国家」の中の「イギリスにおける政党と投票」という節の中でサッチャーとサッチャリズムがごく手短かに次のように総括されているにすぎなかった²²⁾。80年代のサッチャー主義の強さの秘密をギデンズは探る。そこには一貫性をもつ体系的な政策があつたわけではない。79年の保守党の勝利は労働党が労働組合を統率するパワーを失ったからと言われていた。当初のマネタリズムもすぐに放棄されるに至つたし、公共支出

21) 『史的唯物論の現代的批判』および『国民国家と暴力』の内容の詳細については、宮本(1998):49-79頁。

22) ギデンズのテキスト『社会学』は版を重ね2011年に第6版が刊行された(第5版までは松尾精文ほか訳で而立書房より刊行。第6版は本邦未訳)。1992年の第2版ではサッチャー失脚後までカバーし、1997年の第3版ではニューレイバーの登場が盛り込まれ、その後の版には第三の道の解説も増補され現在に至っている。

も増加が続いた。しかしフォークランド紛争における国家指導者としての高い評価が、サッチャー改革の諸政策への共感は弱いにもかかわらず、国民の支持を生み出した。そしてその支持を基盤に、国营企業の民営化と石炭産業の合理化が炭労との激しい1年にわたるコンフリクトの果てに実現され、それがもたらした経済的効果によって国民の支持はさらに強まった。まさに自助自立の個人主義と大衆主義（ポピュリズム）と権威主義への共感が国民に広がったのである。

以上のようにギデンズは、80年代の主要な理論的著作ではサッチャーおよびサッチャー改革には一切言及していない。しかし90年代になると、新しい労働党の誕生を準備した『左派右派を超えて』ではサッチャー主義と旧来の社会主義を克服した新たな社会構想を提示するに至ったのである²³⁾。このギデンズの社会理論家としての80年代の社会変動への対応を参照しつつ、次節では社会理論と社会変動の関連について検討を進めることにしよう。

第3節 社会理論と社会変動

第1節で示したように1980年代イギリスは、サッチャー政権下で激しい社会変動を経験した。しかし第2節で紹介したとおり、80年代のギデンズの主要な社会理論的著作にはサッチャーという人名も、サッチャリズムという用語も一切でてこない。『社会の構成』や『現代社会学と社会理論』のような一般理論的著作ではそれもありうると思われるが、社会変動をとらえようとする全体社会論の著作である『史的唯物論の現代的批判』にも『国民国家と暴力』にも登場しないのだ。それは当時のイギリス社会の状況や変動過程を考えると、いかにも奇妙なことのようには思える。しかし、社会理論とはそういうものとして生成されうると言わねばならないのだろう。もちろんそれはその時代の現実と無縁に理論的思考が推進されるということではない。

23) 『左派右派を超えて』の内容の詳細については宮本（1998）：139-64頁。

生々しい現実に生きる社会理論家は当然ながらそれらを認識しているのだが、それらの認識を前提として生成される社会理論は必ずしもその時代の現実についての具体的な情報を含むとは限らないし、むしろ個別具体的な現象に拘束されず、それらを超越したところに一般的ないし全体的な社会理論が成立するのである。しかし注意すべきは、たとえ具体的には登場しなくても、一般理論にしる全体的な現代社会論にしる、それが生成され展開される過程において、その時代の社会変動がむしろ色濃く反映していると見るべきなのである。本稿はまさにそのような視点から社会理論と社会変動の関連を問うのであるが、それではギデنزの場合はどうだったのであろうか。本節ではそれを明らかにしよう。

ギデنزが80年代の初めに『史的唯物論の現代的批判』を刊行したのはなぜか。その頃の世界思想の最先端で生起していたマルクス主義の根本的見直しや、世界の現実の中での社会主義社会の行き詰まりと、その著作は連動している。社会主義諸国がまだ存在し、東西陣営に世界が分割されていたあの時点で、すぐれた思想家や理論家はマルクス主義の総括に向けて世界各地で動き始めていた²⁴⁾。社会主義陣営の大国ソビエト連邦でさえ、一部の政府関係者がもはや社会主義システムがもたないと深刻に感じ始めていたようだが、まだそれは顕在化せず、アフガニスタンに傀儡政権を樹立し、それに対する諸部族勢力との戦闘を開始するほどの政治的パワーないし軍事的パワーはまだ保持していた。一方イギリスでは福祉国家路線を保守党も労働党も支持し、労働党に至っては主要産業国営化を金科玉条とするなど、大規模労組の影響力によって政治的決定を左右されており、イギリスもまた先進的な資本主義国というより沈滞化した社会主義社会に近い状態であった。1979年に登場したサッチャーはそのような社会主義的構造を破壊することこそイギリ

24) 日本も例外ではなく、たとえば戦後最大の思想家、吉本隆明もマルクス主義の「始末」を開始した。宮本(2011):134-41, 202-33頁。

スを救う道であるという非常に強い信念を持ち、マネタリズム的財政改革や民営化、そして市場化、社会保障の見直し、不効率で不採算な産業の市場からの退場、規制緩和などの方策を次々に実施に移していった。そして相次ぐストライキによってイギリス経済ないし市民生活を破綻させようとする労働組合を強力に規制し、そのパワーを削減するための方策を準備し始めていた。そのような社会主義批判の流れを先取りしつつ、社会理論家ギデンズは古典との取組みの過程においてマルクス主義の問題点を克服した世界史像を探究し、近代の社会変動における国民国家の形成と資本主義ないし産業主義の成立の歴史を明晰に把握する試みを開始したのである。したがって『史的唯物論の現代的批判』の内容には当時のイギリスや世界情勢が一切登場しなくても、ギデンズは当時の社会変動の核心に可能性として潜在していた社会主義ないしマルクス主義の根底の見直しというトレンドを正確に感知し、それを基軸にした社会理論を展開したと言えよう。

それでは『史的唯物論の現代的批判』第2巻と銘打たれた85年刊行の『国民国家と暴力』はどうだろうか。そこで注目すべきはタイトルに「暴力」とあえて表記されたことにほかならない。『国民国家と暴力』は第2節で紹介したように、国民国家の発揮するパワーを産業主義を運営し資本主義を管理することにかかわる次元、そして国民社会の情報を収集し監視し、場合によっては暴力を行使してでも秩序を維持することにかかわる次元に区別して把握していた。したがって特に暴力だけが強調されていたわけではないのだが、ギデンズは暴力をあえて正面に据えたタイトルにしたのだった。これには1982年に勃発したフォークランド紛争と、80年代半ばの大規模労働組合との対決が明らかに映し出されていると思える。

すでに第1節で紹介したように、サッチャーは1979年の政権出発の時点において、首相在任の11年間に実施した方策のすべてを体系的に計画的に把握していたわけではなかったようだ。とくに最初の3年間はサッチャーの施策は何の効果も発揮できないように見えただころか、まさに逆効果と言わねば

ならないほどに、失業率もインフレも財政赤字も一切好転の兆しをみせず、むしろ悪化の一途をたどるかのようであった²⁵⁾。サッチャーの方針に反対する動きは労働党だけでなく、保守党内でも83年の総選挙では労働党に政権を奪還される可能性が高くなっていったため強くなり、彼女に政策的なUターンを迫るまでになった。しかし、サッチャーは強固な信念に基づき、決してぶれることはなかった。そんな時期にアルゼンチンの軍事政権のアルゼンチン沖のイギリス領フォークランド諸島への侵略が勃発したのである²⁶⁾。第1節で述べたように、サッチャーは果敢にこの難題に対応し、フォークランド紛争後に、経済的に破綻寸前のイギリス社会においてサッチャーの人气が昂揚するという奇妙な現象が生じ、83年の総選挙で保守党は労働党に圧勝し、サッチャー第2期政権が発足するに至ったのである。

フォークランド紛争が対外的暴力行使としての戦争であるとすれば、第2次サッチャー政権が着手した対内的暴力行使が労働組合とのコンフリクトであった。最初から暴力行使がなされたわけではないが、暴力行使も辞さないと言う強硬姿勢で、労働組合との全面的対決姿勢を鮮明にし、実際に激しいコンフリクト過程に突入していった。ストライキで対抗してくる暴動並みの運動を繰り返す労働組合への対抗は対内的な暴力行使とならざるをえない。第1節で指摘したように、フォークランド紛争で顕在化した国家権力の暴力的側面は、対内的にも顕在化させることにためらいがなくなったかのようであった。しかも、戦争並みに資源補給計画も立案し準備を重ねたうえで、まずは炭鉱労組に戦いを仕掛けた²⁷⁾。サッチャー政権と労働組合指導部ないし狂信的な活動家とのコンフリクトにとどまらず、労働運動内部の指導部と組合委員、穏健派と過激派、スト派組合員と反スト派組合員とのコン

25) サッチャー第1期政権の危機的状況については注7を参照されたい。

26) フォークランド紛争後のサッチャー人気の劇的回復については注8を参照されたい。

27) 炭労ないしスカーギル指導部との闘争については注9を参照されたい。

フリクトは労働者の家族をも巻き込み死者も出すほどの激しいものとなってしまったが、最終的にスカーギル指導部はスト中止を宣告せざるをえなくなったのである。

筆者はここに『国民国家と暴力』はフォークランド紛争における決断と実行、それによって獲得された支持を基盤に確立された強力なパワーを行使しての極左労働組合指導部との暴力行使も辞さない戦いが、同時代の社会変動の大きなうねりとして生起しなければ生まれなかったであろうという仮説を提示したい²⁸⁾。国民国家が、資本主義や産業主義への対応といった経済的権力の側面だけではなく、監視（管理と統制）や暴力の行使といった政治的権力の側面をも併せ持ち、それらの諸側面の総合として国民国家の権力が成立しており、それらの集合体が世界システムを形成しているといった全体的社会像は、サッチャーの活動が刺激となり発想されたと推測されるのである。

暴力という用語が組み込まれたタイトルが示すように、まさに中心概念となるのは暴力である。サッチャーは新自由主義、新保守主義としての経済的側面の諸政策の実施によって、福祉国家を見直し、当時の社会変動に民営化のトレンドを顕在化させたことは間違いないが、それだけでなく実力行使の側面も見逃せず、その暴力的側面がなければ第2期政権における諸政策の成功はなかったかもしれないと思われる。かつての古典的な近代国家としての国民国家では、近代化を推進する経済的権力および民主主義的な権力という側面と同時に、伝統的な国家と社会から継承された民族主義的イデオロギー的な側面および対内的にも対外的にも暴力的な側面が成立していたのであったが、第2次世界大戦後には、資本主義の高度化と産業化の発展、民主主義的政治体制の安定化によって先進社会ではイデオロギー的暴力的な側

28) ここにIRA（アイルランド共和軍）やINLA（アイルランド民族解放軍）のテロリズムとの戦いを加えることもできる。盟友の政治家エアリー・ニープを1979年、INLAに暗殺され、サッチャー自身も84年のブライトンでの保守党大会ではIRAの爆弾テロで危うく殺害されるところだった。黒岩（1989）：182、245-7頁、高畑（1989）：225-30頁。

面は弱まり、軍部ですら民主主義的で近代合理主義的なエージェンシーに変容しつつあった。そのような時点で、サッチャーは経済合理主義的、民主主義的な思考法を併存させつつも、国民国家の名誉という伝統的な社会から継承された文化的結晶に深く結びついたイデオロギー的威力に裏打ちされた暴力行使も辞さない強烈なパワーを発揮するほどの意識レベルに到達し、それによってイギリス社会の深層にある共同幻想と同致し、国民意識の核心を根底からとらえきったのではないだろうか²⁹⁾。高度近代といっても、国民国家には伝統的な前近代的な共同性や暴力行使を正当化しうるだけの心性を潜在化させており、それは何らかの契機（きっかけ要因）が作動すれば顕在化してくるものであることを、改めて認識せざるをえない。ギデンズはそのような暴力の顕在化を強く感受し、暴力をテーマ化したのではないだろうか。

さて『史的唯物論の現代的批判』や『国民国家と暴力』のような全体社会の変動を対象とした現代社会論の諸著作にサッチャーもサッチャリズムも登場しないとすれば、一般理論の著作には当然ながらギデンズはサッチャーに言及しないのは当然のことと言えるだろう。実際、『社会の構成』にも『社会理論と現代社会学』所収の諸論考にもサッチャーやサッチャリズムへの言及はない。それではそれらの著作は80年代の社会変動とは全く無縁にギデンズが理論的な議論のサイクルを回した産物に過ぎないのであろうか。そうではないというのが本稿の仮説である。前節で示したように、『社会の構成』には、運動論が明確に位置づけられていた。そして『社会理論と現代社会学』所収の社会学ないし社会理論の課題を簡潔に提示した論考でもやはり運動論が重要な位置を占めていた。それはマクロな行為として構造と変動を媒介するものである。宮本（1998）ではそれをギデンズにおけるパワー概念ないしパワー論の中心的位置づけの一環として解釈した。また、そこで示したように、国家もまた特殊な特権的位置を占める運動体であり、国家と諸運動

29) 吉本隆明に由来する共同幻想という概念については宮本（2011）：224-31頁。

の絡み合いが社会変動を生み出していくといった、マクロでダイナミックな全体社会論的な視点をギデンズは保持していたのである。以上のように見てくると、ギデンズ社会理論におけるパワー概念やパワー論の中心性が、80年代の激しい社会変動を暴力論や運動論として感受し受容することをギデンズに可能にしたのではないかという仮説が根拠をもつように思える。

そして90年代にギデンズは具体的にイギリス社会それ自体についての議論の展開を開始する (Giddens, 1994, 1998)。もはや一般理論的な抽象的なレベルでもなく、また近代化論という枠組みの水準において全体的に論じるのでもなく、社会変動を主導する運動体としての政党ないし政府の視点、すなわちニューレイバーないしブレア政権の視点に立って、イギリス社会ないし現代社会の構造と変動を論じることを本格的に開始したのである³⁰⁾。それは生々しい理論的営為であり、ギデンズ社会理論は政策綱領的色彩を強めていくことになった。

ギデンズはニューレイバーとサッチャリズムを全面的対立のもとにとらえない。むしろサッチャリズムの時代のギデンズの経験は、表面的には言及されなかったが、内面的にはその影響が深く及んでいたと想像される。自立の思想と強い政府の評価は、パワー概念の重視としてギデンズの世界理論の内側に確固として組み込まれたのであろう。サッチャリズムの時代はサッチャー自身には成果をそれほどもたらさなかったが、その後のイギリスを根本的に変革した。あるいは、そのような変革の基本的前提を作り上げた。前述のようにニューレイバーの指導者ブレアが明言したとおりイギリスにとってサッチャーの改革は不可欠であり、サッチャリズムの時代を経ることなくしてイギリス社会は新たな段階を迎えることができなかつたろう。新自由主義の改革がすべて良いことであるなどということはありえない。しかし、世界史

30) ブレア政権は21世紀になってからイラク戦争への参戦を契機に国民の支持を失っていくが、政権奪取当時は絶大な人気を誇り、次々と画期的な政策を打ち出した。それが活写されている書物の一例として舟場 (1998)。

の歩みはおそらく1970年代以降の世界に、社会主義の見直しと福祉国家の見直しという課題を与え、サッチャーはいち早く民活・民営化路線をその答えとし、実際に改革を断行したのであった。それがたとえ時代錯誤の思想と価値観に基礎づけられていたとしても、時代が求める自立した競争する個人と集団が構成する社会への方向性は深層のトレンドと一致していたのである。社会変動の表面的な事象に惑わされることなく、その変動の深部に流れる可能性としてのトレンドを理論的に洞察し把握することこそ社会理論家の課題であるとすれば、90年代のみならず80年代のギデンズもまたそれに十分に対応していたと評価することができるだろう。

おわりに

社会理論家は社会変動との関連でいかに理論形成を行うのか。生々しい状況を強く感受しつつも、それを具体的に表現することなく、一般的な理論的概念や、全体的な構成やトレンドの水準で理論展開することは可能であろう。その仮説を具体的に示す事例を、本稿は80年代のギデンズとサッチャリズムとの関連を究明することによって示した。すなわちパワー概念ないしパワー論を基軸に構造化理論を展開していたギデンズは、その理論装置によってサッチャリズムの時代の社会変動を感受し、国家権力論、暴力論、運動論を生成したと見なしうるのである。宮本（1998）ではパワー概念を基軸に構造化理論の内在的展開を描くことによって1980年代のギデンズの著作群を位置づけたが、本稿ではギデンズ社会理論への外在的要因からの影響をそこに付加したと言えよう。

また、当時の社会変動のなかでサッチャー改革は、たとえ表面的にはいかに独裁的で反動的で非民主的に見えようとも、その改革が問題化し標的とする中心的な構造的問題が何であるか、改革が対応しようとしている変動の深部の基本的トレンドが何であるかを見逃すならば、その改革への批判は的外れなものにしかならなかっただろう。批判するならばその構造的問題にどう

取り組むべきか、変動の基本的トレンドにどう対応するかを選択肢を探究しなければ、社会理論は改革の実践者の思想と方策に十分に拮抗しえないのである。ギデンズは80年代にはサッチャー改革に具体的に触れず、理論的水準でのみ対応するにとどまり、サッチャーの時代の終わりとともに改革の功罪両面が徐々に明らかになりつつあった段階で、サッチャー改革の成果としての構造改革を前提にして、そこに残された構造的問題を正確に把握し、それらの解決を目指すことを労働党の内部変革、労働党の近代化、ニューレイバーの生成の運動に伴いつつ開始したのである。それは社会理論家として賢明な道であったと思われる。

参照したギデンズの著作一覧

Giddens (1971) *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press. (犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社, 1974年)

Giddens (1973) *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson. (市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房, 1977年)

Giddens (1976) *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson. (松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法規準』而立書房, 1987年)

Giddens (1979) *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press. (友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』ハーベスト社, 1989年)

Giddens (1981) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press. (『史的唯物論の現代的批判』)

Giddens (1984) *Constitution of Society*, Polity Press. (『社会の構成』)

Giddens (1985) *Nation-State and Violence*, Polity Press. (松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房, 1999年)

Giddens (1987) *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press. (藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店, 1998年)

Giddens (1989) *Sociology*, Polity Press. (松尾精文ほか訳『社会学』而立書房, 1992年)

Giddens (1990) *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (松尾精文・小幡正敏

- 訳『近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結』而立書房，1993年）
- Giddens (1991) *Moderernity and Self-Identity: self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社，2005年)
- Giddens (1992) *The Transformation of Intimacy*, Stanford University Press. (松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房，1995年)
- Giddens (1994) *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press. (松尾精文・立花隆介訳『左派右派を超えて』而立書房，2002年)
- Giddens (1998) *The Third Way: The Renewal of Social Democracy*, Polity Press. (佐和隆光訳『第三の道』日本経済評論社，2002年)
- Giddens (2000) *The Third Way and its Critics*, Polity Press. (今枝法之・千川剛史訳『第三の道とその批判』晃洋書房，2003年)

サッチャーないしサッチャリズムに関する参考文献一覧

- 内田勝敏編 (1989) 『イギリス経済-サッチャー革命の軌跡』世界思想社。
- 黒岩徹 (1989) 『闘うリーダーシップ-マーガレット・サッチャー』文藝春秋。
- 高畑昭男 (1989) 『サッチャー革命。英国はよみがえるか』築地書館。
- 豊永郁子 (1998) 『サッチャリズムの世紀-作用の政治学へ』創文社。
- 舟場正富 (1998) 『ブレアのイギリス-福祉のニューディールと新産業主義』PHP研究所。
- 三橋規宏 (1989) 『サッチャリズム-世直しの経済学』中央公論社。

参照した拙著・拙稿一覧

- 宮本 (1998) 『ギデンズの社会学理論-その全体像と可能性』八千代出版。
- 宮本 (2002) 「ギデンズの社会学-構造化，ハイ・モダニティ，第三の道」『社会学史研究』第24号。
- 宮本 (2006) 「ギデンズの社会学」新睦人編『新しい社会学のあゆみ』有斐閣。
- 宮本 (2007) 「『第三の道』の社会学理論」『桃山学院大学社会学論集』41巻1号。
- 宮本 (2009) 『社会学理論25講』八千代出版。
- 宮本 (2011 a) 「A. ギデンズ『社会学の新しい方法規準』(1976)」井上俊・伊藤高雄編『社会学ベーシックス別巻：社会学的思考』世界思想社。
- 宮本 (2011 b) 『吉本隆明の社会学理論』晃洋書房。

Anthony Giddens and Thatcherism: Social Theory and Social Change

Koji MIYAMOTO

How do social theorists construct theories on the social change in which they are concurrently living, experiencing, and studying? This paper answers this question through examining Anthony Giddens' social theoretical work on the social transformation during Margaret Thatcher's term as the UK Prime Minister (1979–1990). Clearly Giddens produced his major theories on national authority, social movements, and power out of the social change affected by Thatcherism during the 1980s; yet, his publications, except for passages in textbooks, never mentioned Thatcher or her ideology. Analyzing the social transformation in the United Kingdom and Giddens' theoretical points during Thatcher's time, my paper demonstrates how his sensitive responses to the social change in rethinking socialism and welfare state actually critiqued power focusing on the causes of social movements and violence, without directly mentioning Thatcher and/or Thatcherism. My findings suggest that Giddens' social theorization was clever enough to shift attention to structural problems and away from particular individuals and social events, and contributed to sociological knowledge construction of the social transformation.

Keywords: Social Theory, Social Change, Anthony Giddens,
Margaret Thatcher, Thatcherism